

平成21年度壺屋焼物博物館企画展

「壺屋三人男－小橋川永昌（二代目仁王）、金城次郎、新垣栄三郎」

関連講座 報告

赤 嶺 由紀子

はじめに

那覇市立壺屋焼物博物館では、平成22年1月16日（土）から2月28日（日）までの間、企画展「壺屋三人男－小橋川永昌（二代目仁王）、金城次郎、新垣栄三郎」を開催した。これは、戦後の沖縄の陶芸界を発展させた彼らの足跡を様々な作品や関連する資料で紹介し、壺屋焼、沖縄の伝統文化への理解を深めて頂くことを目的としている。この企画展の関連行事として、展示期間中に三人男を直接知る島袋常秀氏をお招きし「私が見た三人男」と題して、彼らの人となりや作陶への姿勢などについて、話を伺った。

次項以降は、この講座の録画ビデオの音声を当館で文章化したものである。口述独特の言い回しなどは適宜修正を行っており、本文についての責任は全面的に当館が負っている。

最後に、講師をお引き受けくださり、講座内容の掲載についてご承諾くださった島袋常秀氏に、厚く御礼を申し上げます。

あかみね・ゆきこ：（那覇市立壺屋焼物博物館学芸員）

平成21年度壺屋焼物博物館企画展

「壺屋三人男—小橋川永昌（二代目仁王）、金城次郎、新垣栄三郎」関連講座

「私がみた三人男」

講 師：島袋常秀氏

日 時：平成22年1月23日（土）午後2時～4時

場 所：那覇市立壺屋焼物博物館3階図書講座室

島袋常秀氏「今回の講演会に向けて「壺屋三人男」について事前に聞き取り調査を行いました。小橋川永昌さん（二代目仁王）については、上江洲茂生さんと島袋明達さん、新垣栄三郎さんに関しては、ご長男の新垣勲さんとお弟子さんである國場一さんから聞き取りました。金城次郎さんについては、私の見聞きしたことをお話しします。私は次郎さんの弟子ではありませんが、次郎さんの壺屋でのカマボコ工房（米軍のカマボコ型兵舎の払い下げを利用して工房を構えたという。コンセットヤーとも呼ばれていた）での作陶の様子と、その後私の実家を次郎さんが工房として使っていたというつながり、また読谷に窯を移した後、私が20年余り一緒に共同窯で仕事をさせてもらった中で次郎さんから話を伺う機会がありました。そのようなお話をします。

まず、永昌さんについてですが、1909年（明治42年）にお生まれになっています。3人の中では一番の年長です。当時、子供は中学には進学せずに、小学校卒業後もしくは中退して家の手伝いをするというのが壺屋全体の流れでした。永昌さんも、小学校卒業と同時に窯業に従事しているということですから、12、3歳の頃です。それから、永昌さんは17歳で独立しているようです。私が26で独立しましたから、とても考えられないような早さの独立です。

さて、1935年（昭和10年）、古典焼と呼ばれる製品が、壺屋で制作されています。永昌さんはその中でも長太郎という、マンガンを使った黒い焼物を製作しています。その後29歳で登り窯の窯変の研究をしています。上江洲茂生さんの話によると、仁王さんの窯は、2番目と3番目の袋は窯変が出やすいとのこと。東又窯でしたら、1番目と2番目の袋が窯変の出やすい場所です。熱がスムーズに回らず、そういった場所の作品が窯変となってでてきます。例えば、オーグスヤー（緑釉）の作品は赤く変化しますが、このように窯の変化によって色が変わることを窯変といい、非常に珍重されました。永昌さんは、オーグスヤーの上に窯変を誘発するヤマトグスイ（県外産の釉薬：戦後、粉殻が手に入らなかった時期に、他府県から透明釉を移入していたとのこと）を塗って窯変を狙っていたということ。す。

32歳からは、赤絵の研究を始めます。有田や九谷、京都では上絵付けの技法がありますが沖縄では完全に赤絵が途絶えていました。永昌さんは、調合を知っているというお婆さんから原料を聞き出し、ヤンバル（沖縄本島北部）の山に行って材料になる土を探し歩いたとのこと。その結果、オニイタの層の中に非常に赤い土を発見、それを拾ってきて窯で焼成し、すり

潰して赤絵の原料にしました。その赤は、単身では発色が悪く、溶けにくいので、フラックス（融剤）を7割ほど入れて作っていたそうです。さて、緑色について、永昌さんが沖縄の色として採用した原料はオーグスヤーのもとです。照屋善義さんの本（『沖縄の陶器』2000年2月21日発行）には緑色の調合は7：3と書かれているが、永昌さんは5：1でした。このように、ヤマトグスイに沖縄の原料を加えて、沖縄らしい赤絵の色合いに調合し使用したことが赤絵の研究結果で、32歳ほどから研究を初めて、実際に色が出せたのが40歳過ぎでした。その頃は電気窯もガス窯もありません。赤絵の焼き付けをどうしたのかというと、上江洲さんからこのように手作りの窯の図を書いてもらいました（図版1）。温度計はなく、焼き上がりは窯の様子を見て判断したそうですが、最終的には、穴（ミー）に針金に吊した小さな作品（色見と呼ばれる）を入れて置いて、焼けたと思われる頃合いで引き出して、赤絵の溶け具合を確認していたとのこと。これは永昌さんが考えたもので、かつては仁王窯で行われていた方法です。ひとつの穴（ミー）に、だいたい3つくらいの色見を入れておいたそうです。

この窯は、火が強すぎると黒くなり、弱すぎると色が出ず、失敗が多く非常に難しい窯で、よくあれだけの色が出せたものだと思います。本人もかなりの失敗を経験していて、展示会の前日、窯をあけたら全て冷め割れしていた、色が出ていなかった、ということもあったそうです。現在は熱効率のいいガス窯を使用していて、このような窯は使われていません。

永昌さんは、県内では三人展などを行い、県外では国画会などに出品しています。35、6歳で国画展などに入賞、57歳では国画賞を受賞していますね。他にも三越などで個展を行っておられますが、残念ながら68歳という若さで亡くなりました。永昌さんの人柄は非常に温厚でしたが、一度、怒りを爆発させたというエピソードがあります。

永昌さんはお酒を少々嗜む方だが、それほど深酒をすることはありませんでした。「飲んだら飲まれるな」と嗜みつつ、弟子たちに酒を振る舞い、自分は席を後にするタイプだったとのこと。ある時、二日酔いで仕事をさぼった弟子がおり、永昌さんは何も言わず、その弟子が作った作品を全部割ってしまったそうです。つまり、口でガミガミ叱ることはなく、行動で示したというわけです。仁王窯は暮れの忘年会があると、松の下などの高級料亭などで行い、大変羨ましかった。その頃から、永昌さんの作品はファンが多く、たくさん売っていたそうです。

永昌さんの焼物作りの流れをお話しましょう。

永昌さんは、赤絵の絵付け、または染め付けをすることが多く、従業員がロクロや型物で製作した製品にも絵付けを行っています。もちろん永昌さん自身はロクロの技術を持っていますが、従業員の作品にも、自分が作ったものにも絵付けを行っています。それが仁王窯の仕事の流れでした。永昌さんの作品には、鳥の絵、魚の絵などいろいろありますが、どこからヒントを得たのかというと、大嶺政寛や金城安太郎といった画家たちが、よく仁王窯に遊びに来ており、彼らから絵の手ほどきをもらったそうです。牡丹文は、多分中国の磁州窯の本を見て、絵付けの勉強をしたのではないかと思います。また、濱田庄司先生がこういうものを作った方がいい、と指導しています。

永昌さんは、一等彫刻（図版2）の壺をよく作っていて、赤絵でも一等彫刻の文様を描いていますが、濱田は「この文様はあまりよくない」と言っていたそうです。しかし、一等彫刻の

作品はよく売れたとのこと。この作品は、今でも仁王窯で制作されています。この壺について、当初は丸に近い形だったが、濱田先生からのアドバイスでスマートな形にしていたそうです。赤絵と窯変の作品はよく売れたので、茶碗や香合などをたくさん作っていました。また、よく手捻りが得意で抹茶茶碗や花瓶も作っていました。

次に、新垣栄三郎さんの話をいたします。1921年（大正11年）に生まれており、13歳の頃にはロクロの仕事をしています。一中（首里高校）を卒業後、濱田、河井両氏の元で1年間修行しています。しかし、父栄徳は焼物よりももっと待遇のいい仕事に就かせたかったようで、教員の仕事を息子に望み、栄三郎さんは台湾の学校を卒業して教職に就いています。父栄徳が亡くなった後、壺屋小学校での仕事を最後に、教職を辞め、本格的に作陶を開始しました。沖展や国画展などに出品し、金城次郎さんと二人展を開始しています。私は琉球大学で2年間栄三郎さんに教えてもらいましたが（栄三郎は、1961年から琉球大学で教鞭を執っている）、先生の教え方は「見て覚えろ」という方針でした。一度お手本を見せて、このようにやりなさいという具合に、手取り足取り教える指導法ではありませんでしたが、これは壺屋の工房でも同じ事です。もちろん、質問があればどんどん答えてくれました。

また、仕事の話は國場一さんから聞いています。仕事場が、工房と大学と2つあるので、どちらでもスムーズに仕事をこなせるように、やり方をちゃんと考えていました。工房では、分業制を確立していたそうです。長男勲氏はロクロや壺作りを専門とし、次男の修さんはお皿や湯呑み、三男の勉さんも同じようにロクロ物を中心に製作、その時、太郎さんという職人がおりまして、彼は土作りと抱瓶、角瓶などの型物を製作、菊おばさんは線彫の加飾を中心に行っています。染め付けは栄三郎さんの奥さんが行っていました。窯詰めはハルおばさんで、ハルおばさんは時間が空くと抱瓶などを製作、一さんは小さな楊枝壺と土練機の担当、娘の紀美江さんは主に販売だったそうです。

壺屋ではどの工房も家内工業でしたので、従業員もほとんどいないのですが、新垣は家族で完璧に分業を行っていました。また、1人が同じものをたくさん作っているのも、ひとつとしておかしい製品は出てこない、素晴らしい製品を作り出しています。それは化粧の細かさ、形の端正さに現れています。一日おきに窯を焚いていたと聞きますので、生産量もすごかったと推測できます。壺屋に組合の販売店が出来た頃、新垣製陶所の売上は組合の半分近い量を誇っていました。それだけ新垣では、安定したシステムの中で、品質が端正で綺麗な製品が作られていたわけです。現在は、息子さんたちが独立して行って、体制が変わりつつありますが、今でも安定した、いい物を製作し続けています。

さて、ここで栄三郎さんの得意としている絵付けは、勲さんにお聞きしたいのですが。このような模様を、よく見ますね（図版3）。」

新垣 勲氏「サトウキビをアレンジしたものかなあと 생각합니다。」

島袋常秀氏「濱田庄司の黍文と同じように、たくさん使われたデザインで、非常に特徴的です。他にもこのような文様を書かれています、非常にモダンで幾何学的です。形態的なことを申しますと、例えばユシピン等（図版4）に見られるように、叩いて、もしくは削って面取りをして、そこに模様を描くというのが、栄三郎さんならではの形態だと思います。この辺りは、濱田庄司の影響もあるのかと思われませんが…。」

新垣 勲氏「それもあがるが、国画会の会員でもあるので、そういった影響もあるかと思えます。」

島袋常秀氏「線彫、赤絵、飛び鉋という技法の併用も見られ、全体的にみて非常にモダンな、ごちゃごちゃしていない、どちらかというと壺屋では書きたがる傾向にあるが、栄三郎さんはすっきりしている、抽象的な文様を描いています。具象物が少ないです。永昌さんは鳥や花などにしても、具象的に描きますが、栄三郎さんは抽象的な文様を描いています。

それから、栄三郎さんは電動のロクロは使わず、亡くなるまで蹴ロクロで作陶されていたと聞いています。ロクロの技術がとても素晴らしく、息子さんたちが受け継いでいます。新垣は非常に手が細かく、緻密な仕事をしています。これは栄三郎さんが作り上げたものなのでしょう。

新垣は、赤絵はどのようにして焼いていたんですか？」

新垣 勲氏「初めは、永昌さんの登り窯の、三分の二くらいの大きさの窯を使っていました。構造は永昌さんの窯に似ているが、小橋川の窯よりも小さい窯だった。その後はガス窯で焼いています。」

島袋常秀氏「その登り窯はいつぐらいまで焼かれていましたか？」

新垣 勲氏「僕が中学生の頃くらいまでかなあ。」

島袋常秀氏「僕は当時幼くて、窯焚きの様子を少ししか覚えていないんですよ。」

新垣 修氏「僕が幼稚園生の頃だったか…だから、40年前か、もっと前か…。」

島袋常秀氏「僕は家が隣だったけど、よく覚えていないんです…ガジュマルの大きな木とアカギがあって、金城次郎さんのカマボコの工房があって、その側に登り窯がありましたね、写真が残っています（図版5）。あの登り窯は、今はなく、写真でしか拝見することができなくなってしまっているのが、もったいないような気がしますね。」

新垣 勲氏「バーナード・リーチの赤絵の作品は、このドラム缶（図版1）のフースー窯で焼いていますよ。」

島袋常秀氏「あれは立派ですよ、お皿の作品がたくさんありましたね。リーチさんが絵付けを行ったお皿は、誰が作ったものですか？」

新垣 勲氏「親父（栄三郎）が作ったものです。あの時の作品は全部栄三郎が作ったお皿です。」

島袋常秀氏「作品の作りは栄三郎さんで、絵付けはリーチさんということですね。」

新垣 勲氏「そうです。」

島袋常秀氏「芹沢圭介先生に、栄三郎さんのお皿を送ったことはないですか？といたしますのは、芹沢先生のところにも、壺屋焼のお皿に芹沢先生が赤絵の絵付けをしている作品があるんです。」

新垣 勲氏「それはよくわかりません、あのときのお皿は全部リーチさんに渡してあると思うのですが。」

島袋常秀氏「濱田庄司先生は、新垣の工房でロクロを引いて作品を作っていましたね。濱田先生は赤絵の作品も新垣で焼いているんですよ。」

新垣 勲氏「そうそう。濱田先生はフースー窯もガス窯も両方あるわけです。」

島袋常秀氏「濱田先生は、沖縄に来ると、新垣の工房で仕事をしていました。私は、近所の大人が「濱田のタンメーがチョードー」と言うので、窓越しに覗いたところ、濱田さんが仕事をしているわけです。濱田先生が来ると、たくさんの方がぞろぞろとついてきて、いろいろなことを聞いたりして、壺屋全体がざわめくので、その時新垣の工房は大変だろうなあと思っていました。何か思い出がありますか。」

新垣 勲氏「そうですね、ある時、濱田先生がお昼休みを取っていると、たまたま栄三郎の抹茶茶碗を買ったお客さんがいました。しかし箱書きがない、困ったなあと言っているところへ、濱田先生が「では、私が箱書きを書いてあげましょう」と、本当に書いてくださったんですね。そうすると、お客さんはこの茶碗より箱書きの方が大事だと言っていましたね（会場に笑い）。こういうのは二度とありませんからね。」

島袋常秀氏「箱書きの話は面白くて、仁王窯では小橋川秀義さんという方がほとんど書いています。製品が売れると、上江洲茂生さんとはとにかく秀義さんを捜しに、壺屋をあっちこっち探し回ったと言っていましたね（会場に笑い）。栄三郎さんは、箱書きは普段ご自分で書かれていますよね。」

新垣 勲氏「そうです。ですから、あのお客さんは非常に貴重な体験をされたことになりま
すね。」

島袋常秀氏「仁王窯も窯変を得意としていますが、新垣もそうです。東又窯で焼くようになってからの窯変についてのお話をします。東又窯は共同窯なので、どの袋で製品を焼くかについては、毎回ローテーションで変わります。1番目と2番目の袋は温度が上がらず焼成しにくいので、皆が好まない場所ですが、栄三郎さんは皆と逆で、1、2番目の袋に当たると喜んでいました。何故かという、窯変が非常にしやすいから、だそうです。窯変の製品はよく売れたとのこと。新垣は、窯の特性をしっかりと使いこなして、美しい窯変を出しているのです。このような窯変（図版6）については、正直なところ新垣もオーグスヤーの上に何かヤマトグスイをのせていますか？」

新垣 勲氏「三号釉とシルグスイを混ぜて、オーグスヤーの上にのせていましたね。そうでないと、ガス窯ではこのような色はでないからね。」

新垣修氏「登り窯でもなかなか出ませんね。この作品の色の出方は100個の中の1個ですよ。」

新垣勲氏「本当に、このような色は東又窯でないと出ないね。」

島袋常秀氏「やはり、登り窯が持つ独特の炎の流れというものがあるのでしょうかね。」

新垣勲氏「小橋川の窯変と新垣の窯変は、同じ釉薬を使っても出方は違ってきますね。」

島袋常秀氏「大学では、わざと窯変が出るような焼き方を行ったりしますが、そういう操作でこの色は出せませんか？」

新垣修氏「出ないですね。還元焼成でも、水気の多い還元などいろいろとありますからね。」

島袋常秀氏「湿気が関係していますね。」

新垣修氏「また、オーグスヤー同士は引き合いますからね、飛ぶ、というやつ。」

島袋常秀氏「ええ、オーグスヤーは飛びますね。焼物をやっている人はよくわかると思いますが、オーグスヤーを掛けている作品の側に他の作品を置くと、オーグスヤーの色がまわりの作品に移ってしまうんです。大学では真っ白い磁器を隣に置いてはいけないと指導しています。」

また、練り込みの作品が今回展示されています（図版7）。これは方言ではムンマジリーといいますが、赤と白の土を混ぜ合わせて、その土をロクロでひくのですが、これがうまく模様と

して出るかという、それは大変難しい。恐らくこの作品について、栄三郎さんは計算して作ったのだと思いますが、非常に素晴らしい作品として仕上がっています。これは本当にすごいですね。

この作品（図版8）のように、白化粧を行った後、線彫や掻き落としで模様をつけて、これだけの、シンプルで何とも言えない美しい作品があるんですね、栄三郎さんの作品には。非常にバランスがいいです。それから、このような縦に線を引くという模様（図版9）もよく使っています。沖縄では、タンメーヒジ（おじいさんの髭）とも言っていますね。

この作品（図版10）についても教えてください。」

新垣 勲氏「これは、白化粧を行わずにクルグスイを掛けた後、オーグスヤーを重ねています。」

島袋常秀氏「非常に凝っていますね。」

新垣 勲氏「そのかわり、失敗も多いです。なかなか綺麗に色が出ないんです。釉薬が縮れるということはありません。このやり方では、赤い色が出にくいですね。」

島袋常秀氏「ありがとうございました。では、この辺りで次郎さんのお話をしましょう。

金城次郎さんについてはみなさんもよくご存じだと思います。

次郎さんは貧しい家庭に生まれています。当時、壺屋で貧乏な3つの家があり、ひとつは私の家でした（会場から笑い）。それと、カーヌハタグラーという家、そして次郎さんの家、これが壺屋の3大貧乏と言われていました（笑）。次郎さんは小学校卒業の前に新垣の家に丁稚奉公をしています。そこで技術を習得し、17歳頃からもの作りを始め、19歳でロクロを任されるようになったとのこと。

当時の壺屋の工房ではどこでもそうですが、ロクロはロクロ師の先輩方で埋まっていて練習ができません。見習い陶工たちはどうしたかという、先輩方が帰った後や早朝、昼休みなど、道具が空いたときに練習するしかありません。このようにしてロクロの技術を磨き、ある程度作れるようになったとき、親方から「そろそろアンダチブーグラー（小さな楊枝壺）でも作りなさい」ということでロクロを与えられます。それからまたロクロの技術を向上させていき、作れる製品の種類を増やしていくわけです。

さて、次郎さんは結婚後に旭窯業株式会社という荒焼を作っている会社に3年程勤めています。生活が苦しかったのかもしれませんが、これはあまり知られていないですね。その後栄徳窯に戻っていますが、戦争を経験した後、栄徳窯の側にカマボコ型の工房を作って独立しています。僕はその時の様子をよく知っています。夜中…朝方でしたか、東又窯の窯焚きは自分達の袋の番になると、まだ皆が起きていない時間でも窯当番を交代します。次郎さんの工房は通り道でした。その時間に、赤い白熱球をつけて、次郎さんがロクロに向かっていたことを覚えています。こんなに早くから仕事しているのか、と感心しました。というのも、当時の次郎工房は、ご長男の敏男さんと2人だけで仕事をしていまして、新垣のように、従業員がたくさんい

るという状況ではありませんでした。当時、共同で使う登り窯では2つの袋を埋めなければなりませんでしたが、2人でその量を作るというのは大変なことだったんです。雑器は次郎さん、厨子甕は敏男さん、という具合に分業していたようです。とにかく次郎さんは食器を中心にロクロを回していました。登り窯では、だいたい八寸くらいの高さで段を組みますので、とにかくたくさん量が入ります。その量を埋めるために、次郎さんはたくさん製品を作っています。次郎さんは天真爛漫な方で、作品にもおおらかさが現れています。僕が訪ねていくと「常秀、チャーグワー飲め」といって気楽に受け入れてくれました。もの作りに関しても、多少の歪みなど気にすることのないおおらかさがありますね。

ある時、チューカーを買おうと思って選んでいると、とてもいい作品だが、どうも座りが悪くゴトゴトしてしまう。「次郎さん、これゴトゴトしているよ」というと、次郎さんはチューカーを地面の歪んだ所に置いてみせました。そうすると、綺麗に置けるんですね。まあ、このくらいでいいじゃないか、と笑う次郎さんが印象的です（会場に笑い）。なぜ製品が歪むかということ、窯の中のタナイタが原因です。今のようなまっすぐな既製品のタナイタではなく、当時は自家製のタナイタを使用していますので、使用している間に歪んだりします。そこにそのまま製品を置くと、高台が歪んでしまいます。それを防ぐために、メーガニクを敷いて歪みを調整して置いたりもしますが、それをしないと、どうしても歪みがでてしまいます。そういった製品が出てきても気にならないという、おおらかさが次郎さんにはありましたね。

その後、カマボコの工房がなくなって、次は僕の住んでいた家が次郎さんの工房になりました。そこでしばらく仕事をしていましたが、ちょうどその頃、壺屋では登り窯が使用できなくなってきました。仁王窯、新垣はガス窯へと移行していますが、次郎さんは登り窯で焼きたいという強い意志があり、当時、読谷村座喜味に住んでいらっしゃった曾根信一先生から「読谷に来ませんか」と声を掛けられ、読谷に工房を移しました。当初、その場所は何もなく、奥は弾薬処理場となっており、大変寂しい所でした。曾根先生が遊びに来ると「今日初めて人と会った」と言って喜ぶくらい、人気のない場所だったそうです。

道は整備されておらず、人が来ることはありません。タクシーを使って家に帰ろうとすると「ここから先は家なんてないはずなのに」と怪しまれ、タクシー強盗を疑われてしまい、いつも途中で降ろされたというエピソードがあります。

また、ある日、曾根先生がいくら次郎さんに電話をしても全く通じないことがありました。これは大変なことになったと先生が駆けつけたところ、次郎さんはピンピンしている、では何故電話が通じなかったかということ、当時は次郎さんの家の周りには電柱もなく、電話線は古い木に巻き付けていたのですが、台風で木が折れ、電話線も切れてしまっていたそうです。というわけで、最初の頃の読谷は大変だったそうです。次郎さんが読谷へ移った頃、僕も手伝いに行きましたが、木もほとんど生えていなかったですね。ただ原っぱが続いており、遠くにゴルフ場がみえました。その時、緑の豊かな場所にしたいということでガジュマルや松などいろいろな木を植えて、現在はとても茂っていますね。

さて、次郎さんの読谷での最初の窯は、製品が黒こげになって失敗をしたようですが、徐々に窯が焼けるようになってきたそうです。読谷に移って1年ほどで人間国宝に認定され、その

年は国際通りなどの店から次郎さんの作品がドバツとなくなるという次郎さんブームがありました。しかし、本人に国宝になった、というのはなく、いつまでも自分は陶工であり、国宝認定も気にしない、という方でした。いつでもお茶を飲みなさい、と入れてくれたし、昼間は外にゴザを敷いて従業員とお茶をするなど、共同窯を行う中で、とてもいい雰囲気では僕は入らせてもらいました。仕事も、外から見させてもらっていました。

倒れる前は蹴ロクロで仕事をされていましたが、その後は電動ロクロを使用していました。線彫も、難しそうにやっていたようですが、しかし実際に自分で一生懸命描いていました。

作品ですが、一番みなさんがご存じなのは線彫の魚、海老、貝などで次郎さんの得意とするものですが、壺屋時代は小さな皿からマカイなども作ってしまっていて、僕が見たところではオーグスヤーと飴釉の点打ちで彩られた三彩が多いです。またイッチン、刷毛目、飛び鉋、指描き、掛け分けもあります。赤絵はほんの少ししかありません。終戦直後、物の売れない時期になんとか売れる物を作ろうということで赤絵の製品を作り、敏男さんがそれをコザ（沖縄市）に持って行って売っていた時期があったそうです。アメリカ兵は赤い色が入っているもの、または装飾的な焼物しか買わなかったとのことで、とても大変だったと聞いています。しかし、赤絵をやっているのはその時期だけで、全体的な次郎さんの仕事の流れでは、赤絵は微々たるもので、それ以外の製品が多いです。

次郎さんは、壺屋時代にいろいろな加飾を行っています。読谷に移ってからは、魚の次郎と言われるくらい、魚を描いているものが圧倒的に多くて、またそれが売れるので、売れる物を作るというのが陶工ですから、魚がメインになっていますが、それ以前の壺屋時代の作風には、壺屋焼の特徴的なものがたくさんあります。それも含めて、次郎さんを評価すべきだと僕は思います。

さて、永昌さん、栄三郎さん、次郎さんについて、その印象、仕事の話、人柄をお話してきました。この三人はそれぞれに個性があって、その中で仕事をしっかり自分の持ち場を持っておられて、壺屋三人男と呼ばれるようになりました。私たちはこの先人たちの残してくれたものを参考にして、よりいい物を作れるように、今後の壺屋の世界を展開していきたいと思っています。」

その後、企画展展示会場へ移動し、作品解説会、質疑応答が行われ、盛況のまま講演会を終了した。

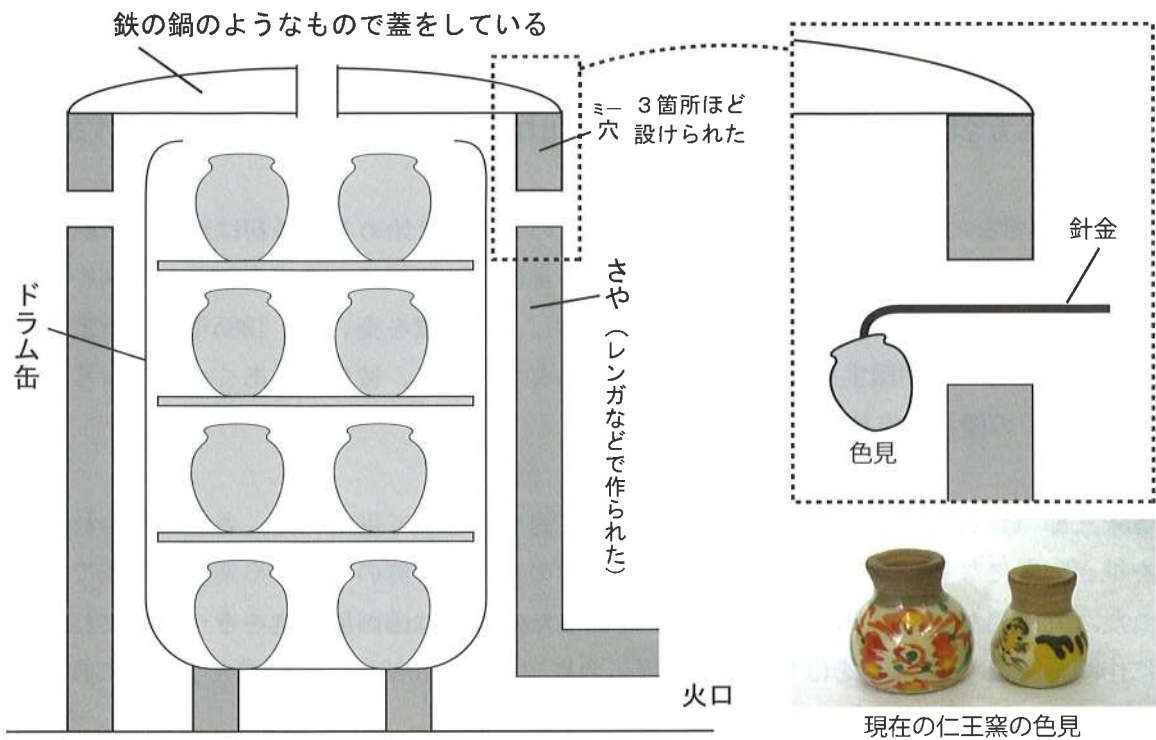
壺屋三人男：小橋川永昌（二代目仁王）、金城次郎、新垣栄三郎の三人を指す。戦後沖縄の芸術文化発展の中心となった「沖展」の第6回（1954年）への出品を皮切りに、同年、次郎、栄三郎が「第一回陶芸二人展」を開催、1958年には永昌も加わり「陶芸三人展」として継続的に展示会を開催する。さらに国展への出品、受賞など彼らの活躍はめざましく、後の壺屋焼に大きな影響を与えていく。いつしか彼らは「壺屋三人男」と称され、県内にとどまらず県外でも展示会を行い広く壺屋焼の存在を刻んでいった。

小橋川永昌（二代目仁王 1909～1978）：新垣栄徳・新垣栄秀とともに壺屋の三大陶工として名高い小橋川仁王を父として生を受けた。戦前は父の成形した器に線彫、盛付、掻き落としの技法で加飾を施す手伝いの傍ら、低迷する上焼の行く末を憂い、美しい「赤絵」に活路を見いだしていく。1950年代には見事赤絵を復興させ、その功績は現代でも高く評価されている。後進の指導にも力を注ぎ、彼の元で修行した仁王窯出身の陶工が、県内各地で活躍している。

金城次郎（1912～2004）：12歳頃から、新垣栄徳の元で働き始める。最初は雑役から始まり、次第にロクロを始めとする上焼の伝統的な技法を身につけていく。濱田庄司との知遇を得たのもこの時期である。1972年には読谷村に工房を移し、登り窯を築いた。1985年の国指定重要無形文化財保持者（人間国宝）認定は、あまりにも有名である。彼自身はあくまでも自らを陶工とし、数多くの優れた作品を生み出した。

新垣栄三郎（1921～1984）：上焼の窯元、新垣栄徳を父として生まれた。名工と謳われる父の跡を継ぎ陶工になるつもりでいたのだが、その父の希望で台湾の学校を卒業後小学校で教鞭を執った。父栄徳が亡くなり、その後教職を退職した栄三郎は国画展入選をきっかけにして意欲的に作陶を開始、「沖展」をはじめ様々な展示会に出品し、1963年には琉球大学美術工芸科に招かれ、後進の指導を行っている。

島袋常秀：琉球大学美術工芸家を卒業後、父である島袋常恵氏に師事、壺屋焼の伝統的な技法を習得している。1978年に国画会新人賞、1984年に沖縄県工芸公募展優秀賞、1986年現代陶芸展奨励賞、1990年沖縄タイムス芸術選賞奨励賞など数々の賞を受賞、2007年国画会会員となる。また、1987年から工房を読谷に移し、金城次郎窯を共同窯として使用している。同年、沖縄県芸術大学講師として採用、助教授を経て、2002年に教授として現在も活躍している。



図版1 ドラム缶を利用した赤絵焼き付け窯 (断面図)



図版2 一等彫刻の作品 彫刻花瓶 (個人蔵)



一等彫刻赤絵の作品 赤絵大壺 (館蔵)